

旧満州「映画のような生活」



満鉄の社宅で同僚らとトランプに興じる井上さん（右から2人目）＝1940年ごろ撮影

ニッポン 写真遺産

思い出まるごと
スキャン

1940年ごろ 満鉄の社宅

大正・昭和・平成を生きてきた95歳の女性が、新たな時代を前に、青春時代のアルバムをデジタル保存することにした。夢にあふれた旧満州（現在の中国東北部）での生活と、戦争に翻弄された苦難の記録を、きちんと子や孫に伝えたいという思いからだ。

色あせた赤い表紙のアルバムに、印象的な一枚がある。トランプで遊ぶ5人の若い女性と1人の少年。朗らかな笑顔からは、この約5年後に起こる過酷な運命は想像もつかない。

井上さんは熊本生まれ。女学校を出た後、どうしても事務の仕事がしたかった。でも、地元には求人がない。そんな中、満州在住のいとこから「満



満州から持ち帰ったアルバムを開く井上ツギ子さん＝2018年12月撮影



社宅には観葉植物を置く棚もあった。その前に同僚らと並ぶ井上さん（写真右端）＝1940年ごろ撮影

もし終戦までいたら...



戦時中の南満州鉄道の主要路線と現在の地名

鉄なら事務員の職がある」と聞いた。両親を説き伏せ、39年に満州へ渡った。満州での「独身OL生活」は、夢かと思うほどモダンだった。ヒールのある靴を生まれて初めて履いた。休日はハイキングやピクニック。「映画でしか見たことがないような生活が満州にはあったんです」

社宅は鉄筋コンクリート2階建て。その1階の住戸にいとこ一家と暮らした。まず、水洗トイレに驚いた。観葉植物を置く棚もあった。3DKの間取りは機能的で、「結婚して家を建てるなら、これを参考にしたいと思うくらい素敵でした」。

しかし、41年に太平洋戦争が始まり、42年には熊本の兄に召集令状が届く。戦況の悪化を心配した両親は帰国を強く説得。井上さんはこれに応じ、満州生活は約3年で終わった。

もし終戦の45年夏まで満

州にいたら、厳しい状況に置かれていたはずだ。戦後、命からがら帰国した元同僚の話では、ソ連兵が近くに来たときと天井裏に隠れ、性的暴行の被害を避けるために頭も丸刈りにしたという。もちろん身一つでの帰国で、アルバムを持ち帰る余裕もなかったそうだ。

ひと足早く帰国した井上さんは、アルバム2冊を持ち帰った。しかし、45年7月の熊本大空襲で1冊が焼失。残った1冊に収められていたのが、この写真だ。アルバムの中の何枚かは、終戦後に帰国した元同僚たちに分けてあげた。

井上さんは「両親から『帰っていい』と言われた時は『え、なんで』と思っただけで、そのまま満州にいたらどんな目に遭っていたか。今となっては両親に感謝しかないですね」と振り返った。

朝日新聞社のアルバム・古写真デジタル化サービス「ニッポン写真遺産」に寄せられた印象深い写真を随時ご紹介いたします。同サービスへの問い合わせ・資料請求は、06・7878・6588（平日午前10時～午後5時）へ。